

街へも近く、極上のものを求めない限りはだいたい間に合うので、買い物はかえって便利である。但し物価は不動産等ごく一部を除いて、地方都市だからといって安くはない。全国の都市で高い方から第5位という統計もある。生鮮食品でみると、県内産のものは安い、県外のものは高い。東京では流通システムが東京へ集中するように出来ている為か案外何でも安く買えるのだとこちらへ来て気がついた次第である。気候的条件―特に冬の寒さと降雪（1月の平均最高気温5.1℃、東京9.4℃）―と文化的施設、催し物の少なさ（例外は大学とテレビ局。四年制大学は8校、テレビ局は民放4局あるが、人口比で言うとどちらもいかにも多すぎる気がする。）を除けば、概ね東京の生活と変わりなく、日常仙台らしさといったものをあまり感じることはない。

しかし東京と同じ生活とはいったい何だろう。どこへ行っても画一的な生活を求めているのは我々通勤族ではないか。その為それぞれの地方の独自性とか郷土色といったものが失われて来ているのではないかという気もする。特に仙台の場合東京指向が著しいのだが、これは東北人の消極性、忍従性、或いは歴史的な中央権力に対する隷属性などによるところもあるような気がして少々淋しい。

（14回生）

## イギリス便り

西岡陽子

夫の仕事の都合でイギリスに来て早や5か月。家々の窓辺に飾られたクリスマスツリーがとてもきれいだ。道行く人の目を楽しませよう道路側の部屋に置かれていて、カーテンをあけてある家も稀ではない。この付近はイギリスでも最も美しい地方の一つといわれ南イングランド特有のなだらかな美しい田園地帯に歴史ある町や村が点在している。ここゴードミングもそんな町の一つ。ロンドンの中心から南西に約50km、人口2万人足らずの小さな町である。そこかしこに築後200年、300年という黒い柱と白壁の建物が残り、今住んでいる家も80年以上も前のものという。家々のレンガと屋根のスレートは渋い色で、周囲の冬でも青々とした牧草地や森によく調和し、落ち着いた雰囲気をかもしだしている。

人々はとても人なつこく、道で目が会うとニコリ微笑む。特に11か月の息子連れて歩いていると必ずといってよいほど何人かがあやしてくれる。バスを待つ間にも知らない者同志がおしゃべりを始めている。また「サンキュー」が頻繁に発せられ人々の気持ちをなごやかにしてくれる。大学の先生も多くが、毎回講義の終わりに「サンキュー」という。窓口で切符を買うと駅員が「サンキュー」、釣り銭を受け取ったお客も「サンキュー」、出札口で切符を見せるとまた「サンキュー」という具合。バスの乗客が降り際、運転手に「サンキュー」と挨拶したりする。声の調子が軽快で、聞いていて実に気分がいい。気をつけてみると、母親がまだ言葉を話せないほんの小さな子供に「サンキュー、マミー」と言って教えている。幼い時からしつけられるのだろう。

まだ、夫婦が生活の単位として確立している感じを強く受ける。野原の散策もスーパーの買い物も夫婦連れが圧倒的に多い。そしてその仲の良いこと。年代を限らず腕を組んでいる。中学生の子を持

つ隣の共働きの夫婦も毎週土曜日には手をつないで買い物にでかけるし、朝の出勤時に手を振りあう様子はまるで新婚さん。そういえば、夏の観光バスで横の席にすわった老夫婦はバスの中でも外でも手をつなぎ通しであった。ともあれ老夫婦が手を取りあい、いたわりあって歩いている姿はほほえましい。でも離婚率が高いそうで仲が悪ければ夫婦でいないということかもしれない。離婚した人や連れあいを亡くした人の再婚も日本よりかなり多いようである。

イギリス人が古い物を大切にするのも気づいたことの1つ。アンティークと呼ばれる古物屋、骨董品屋はどの町でも目につくし、家々の調度品、装飾品も古くシックだ。洋服も流行遅れのものを平気で着ている。今住んでいる家は、外国留学中の大学の先生の家を備品も含め借りたものだが、テレビも白黒で、洗濯機も日本で見たこともないような旧型である。親が新品に買い替えた時に譲り受けた20年以上も前のものだという。さすがに最近脱水機の調子が悪くなり新聞の広告に目を通すようになった。その広告とは不用品交換欄で、地方新聞や町の掲示版で大きなスペースを占めている。今まで接触を試みた2件はともに売却済みとのことであった。使い捨てが盛んで人々が新しいものに飛びつく日本のように産業が発展しないのも無理のないことかもしれない。

( 21 回生 )